様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ９ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８１２３８

研究課題名（和文）「言語力」と「コミュニケーション能力」を育成する書字教育カリキュラムの開発

研究課題名（英文）Development of handwriting education curriculum for linguistic competency and communication ability

研究代表者
青山　浩之（AOYAMA, Hiroyuki）

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：４０３２３９１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、国語科の「文字を書くこと」に関する学習の効率化・最適化を図るために、これまで別立てのカリキュラムとして行われてきた書写学習を、国語の言語活動の学習などと効果的に関わらせる方法を実践的に考察し、「言語力」や「コミュニケーション能力」の育成に機能する書字教育カリキュラムを開発した。その過程で、リテラシー的機能、コミュニケーション的機能、情報的機能といった書字能力の構造を明らかにし、その育成に向けた実践の方法を考察することができた。

研究成果の概要（英文）：In the present study, “handwriting education curriculum for linguistic competency and communication ability” was developed to improve efficiency and promote optimum function of learning concerning “writing character” in Japanese, discussing the methods to associate “handwriting education”, which has been done as a separate curriculum, with “Learning about linguistic activity of Japanese”. In the process of this study, the followings are confirmed.
Structure of the ability such as the literacy functions, the communication functions and the information functions in the handwriting ability is clarified.
The way of handwriting education curriculum and practice to bring those ability up was made clear.

研究分野：教科教育学

キーワード：教育学　言語力　コミュニケーション能力　書字　国語科　書写教育　言語活動の充実

１．研究開始当初の背景

（1）国語科及び書写教育研究の視点から

従来、国語科教育研究において、書写学習と他の言語活動とを関わらせた研究、あるいは文字・表記・語句等の学習と書写学習とを統合的に再組織しようとした研究は、体系的には行われてこなかった。例えば青木幹勇の『第三の書く』（国土社、1986）で、書写を「第一の書く」、作文を「第二の書く」、そしてそれ以外に視写・聴写・メモといった「聞くこと」や「話すこと」を支える「第三の書く」の存在が指摘されながら、これまで「言葉の力」と「文字を書く力」の関連を図った教育研究の枠組みが開発されてこなかった。

このことに対し、本研究代表者である青山は、言葉や思考を効果的に書きまとめたり、内容を整理して読みやすくまとめたりといった点について、「聞き取り」の際のメモや、学習活動におけるノート、「観察記録」等をもとに、初等・中等教育段階の児童・生徒の書字資料を分析し、書字の情報的機能に関わる能力の実態と問題点を明らかにする研究を進めてきた。それらの成果の一部は、研究代表者・青山の「学習者の言語活動に機能する国語科書写のあり方について」（『書写書道教育研究』20号、2005）や「言語活動に機能する書写の学習－目的・相手への意識化を図ることの課題と実践－」（『月刊国語教育研究』416号、2006）の中で指摘し、「言語力」を高めるための書写学習について、概括的な方向性を示唆してきた。

その上で、青山が研究代表者として行った平成22年度～23年度科学研究費（挑戦的萌芽研究）「「言語力」育成に機能する書字教育カリキュラムの開発」により、言語活動を統合的にとらえ、書字の意識や技能と有機的に関わるような新たなカリキュラムと教授法の研究に対する足がかりを得ることができた。また、それらの研究成果は、「言語活動に機能する書写」（『月刊国語教育研究』467号、2011）や「言語活動を支える書写の実践的研究－読みやすく見やすいノートの書きまとめ指導を通して」（『書写書道教育研究』25号、2011）、「メモの効率を向上させる国語力と書写力についての考察」（『書写書道教育研究』26号、2012）などに表し、学術的見地からの評価が得られている。さらに、そうした評価をふまえた上で、これらの成果に基づく実践を『「書く力」を育てる　小学校国語　書写の授業プラン』（明治図書、2012）として出版し、広く社会に向けて発信してきた。

しかし、一方でいまなお現行の国語科では、〈正しく書く能力〉を育成するための文字・表記・語句等の学習と、〈整えて読みやすく速く書く能力〉を育成するための書写学習とが、非連続的な構造で行われ、内容的・時間的な重複を生み出している。

（2）コミュニケーション能力育成の視点から

また同様に、言語力育成と表裏一体で考える必要があるコミュニケーション能力の育成についても、「文字を書くこと」の学習の中では研究の視座となりにくかった。従来、書写の学習では基準（文字手本）に基づく技能習得の学習が主と捉えられやすく、「文字を書くこと」に関する知識や技能は何のために身に付けるのかを考察したり、実際のコミュニケーション体験と有機的に結びつけて学習したりする機会が乏しかった。したがって、そうした観点からのカリキュラムや教授法の開発が行われにくいのが現状である。

現行の小・中学校学習指導要領では、言語活動の充実により、コミュニケーションに関する能力や感性を育んだり、情緒を養ったりすることが期待されている。言語力がコミュニケーション能力と密接に関わり、今後、その育成が目指される中で、他者との関わりの中で文字を効果的に書字したり、情報的に機能する書きまとめ方ができたりする能力も

重視していかなければならない。そうした書字力が、「伝え合う力」を支え、コミュニケーション能力の育成にも機能すると考えられるからである。

２．研究の目的

そこで、本研究では、国語科の「文字を書くこと」に関する学習の効率化・最適化を図るために、これまで別立てのカリキュラムとして行われてきた書写学習を、国語の言語活動の学習などと効果的に関わらせ、「言語力」や「コミュニケーション能力」の育成に機能する書字教育カリキュラムとして実践的に研究・開発することとした。

具体的には、

① 実際の国語の言語活動や文字・表記・語句等の学習と書写学習との関連性を検証する。
② 育成を目指す書字能力を措定する。
③ 措定した書字能力を育成する新たな視点の「書字学習」を組織し、カリキュラムと教授法を開発する。

３．研究の方法

「言語力」「コミュニケーション能力」育成に機能する新たな「書字学習」の枠組みを提案するために、文字・表記・語句等の学習や言語活動場面に応じた国語学習の現行カリキュラムを検討し、書写学習との共通点と相違点を明確にした上で、双方の学習を効率化・最適化するためのカリキュラム案を作成した。その過程で、新たな「書字学習」で育成すべき書字能力を措定し、実践の場における臨床的検証・評価を行った。

(1) 問題の所在と理念の明確化

従来の文字・表記・語句等の学習や国語の言語活動に関する学習と書写学習のカリキュラムに関する問題点を検討し、整理した。

その上で、それぞれの学習の共通点と相違点及び関連性等を検討し、新たに提案する「書字学習」の理念について考察した。

(2) 育成を目指す書字能力の措定

新たに提案する「書字学習」によって育成する書字能力を措定するために、文献による整理だけでなく、実際の授業観察や教員から直に情報を得るなどして分析を進めた。

(3) 学習内容の設定と組織

育成を目指す書字能力と関わらせながら、学習内容の設定、組織化を進めた。

具体的には、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」それぞれの言語活動を支える「文字を書くこと」の活動を組織化、構造化した。

(4)「書字学習」のカリキュラム案の作成

以上を通して新たに提案する「書字学習」のカリキュラム案を作成した。

(5) シミュレーションによる検証

新たに提案する「書字学習」のカリキュラム案を、国語科の他の領域との関係において機能するか理論的検証を行い、明らかになった問題点について先進地区の小学校や本学部附属小学校等において実践的検証を行った。その上で、改善点を整理し、考察した。

４．研究成果

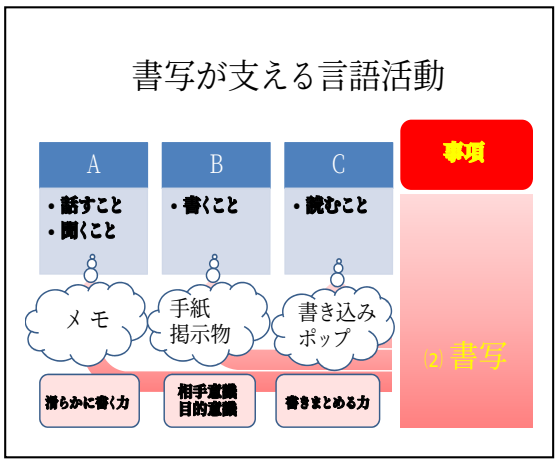
(1) 言語活動を支える書字教育の組織化、構造化から見えてきたこと

今日の教育課程において、国語力は学力の問題とも関わる大きな課題として捉えられ、重視されてきている。平成元年改訂の新しい学力観、平成 10 年改訂の「生きる力」、平成 19 年の学校教育法改正における学力の三要素、それを受けた平成 20 年改訂の「確かな学力」。これら数次にわたる改訂等で、育成すべき資質・能力が学力観として示されてきた。とりわけ、思考力、判断力、表現力等を育成する観点から、活用を図る学習活動を重視するとともに、言語活動の充実を図ることが求められている。また、すでに次期改訂に向けた諮問（2014 年 11 月）が行われ、その

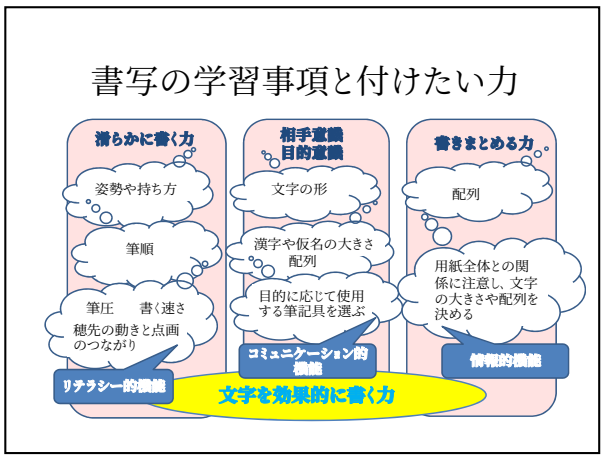
諮問理由では「実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的･協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要」として、主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）の充実なども求めている。協働的な学びは、対話的な学びとも言われ、国語力の重視、言語活動の充実、そしてコミュニケーション能力育成は今後一層推し進められていくと考えられる。

こうした流れにおいて、本研究における「言語力」及び「コミュニケーション能力」に関わる書字能力の措定は、とりもなおさず「文字を書くこと」が学力をどう支えるかといった視点や、そのための学習の構造を明らかにすることにつながった。

例えば、「話すこと・聞くこと」の中で、文字を書く場面として「メモ」が挙げられる。話の内容を理解し、重要な言葉をもらさず書き留めるには、滑らかに速く書く力が必要になる。また、「書くこと」においても、ただ書くだけにとどまらず、相手意識や目的意識が伴う書写スキルとして捉えていく必要がある。見やすく読みやすい「掲示物」を書くことができるには、具体的にどのような力が必要になるのかといった捉え方である。さらに、「読むこと」には、読みながらの書き込みや、読んだことを活用し、交流や発信の場面を想定した「ポップ」などの活動も考えられる。そこで必要になるのは、伝わりやすく分かりやすい書きまとめる力などである。



これら、滑らかに書く力、相手意識・目的意識、書きまとめる力といった育成すべき資質・能力と、従来の書写の「事項」を合わせて構造化することによって、文字を効果的に書く力を育成する書写の役割とともに、「何ができるようになる」ために「何を学ぶか」といった新たな書字学習の視点も明確にすることができた。



さまざまな言語活動場面で滑らかに効果的に書くことができる力は、いわばリテラシー的機能として重要であり、相手意識や目的意識をもった書字はコミュニケーション的機能として重要であり、伝わりやすく書きまとめる力は、情報的機能として重要である。このようにコンピテンシー・ベースの捉え方で従来の書写学習を構造化することによって、言語力（言語的諸能力）やコミュニケーション能力を育成する書字教育が組織化・構造化していける点を具体化することができた。

（2）実践的検証及びカリキュラム開発から見えてきたこと

上記の組織化、構造化にもとづき、「言語力」「コミュニケーション能力」に機能するカリキュラム案を実践的に検証するなかで、まずは、①相手意識が書写力（文字を適切に書く力）を確かなものにすること、②その上で、自分の考えにふさわしい言葉を使う力としての語彙力と書写力とを有機的に関連させていくこと、③それらが融合し、目的意識

が伴うことで、場面にあった書き方ができる書字力（仮に、文字を効果的に書く力）も確かなものになっていくこと等を明らかにした。これらの成果は、研究協力校における実践を図書としてまとめ、広く社会に向けて発信する予定である。

また、研究の過程で、新聞社と連携し、語彙力と書写力を高める教材開発を行うことができたのも本研究の具体的な成果と言える。(『天声人語書き写しノート　美文字版』朝日新聞　2014)

さらに、構造化のなかで一つの枠組みとして捉えた「リテラシー的機能」の視点は、当初は予期していなかった「滑らかに書く力」の研究へと広がり、具体的な書字動作や滑らかな手指運動を身に付けるための毛筆学習の効果を検証することにもつながった（「小学校低学年期における毛筆経験による硬筆書字への影響」『書写書道教育研究』29 号、2015)。このことは、「言語力」「コミュニケーション能力」を支える「書字技能」という根本的な視点を再確認させるものであり、カリキュラムや教授法の考察に広がりと厚みを持たせる上で示唆的であった。

（3）今後の課題

本研究では、「言語力」や「コミュニケーション能力」を育成する書字教育の組織化・構造化を行い、育成すべき能力の措定を進めた。その成果は上記のように多岐にわたり、また学術的見地の評価も得られている。しかしながら書字が関わる言語活動の範囲は広く、すべてを実践的に検証するにはさらに継続的な研究が必要である。また、書字能力の措定によって書字原理を究明し、「書字学習」に関する新たな内容や方法の提案を行う過程で、今回のように国語科及び書写領域において従来行われてこなかった研究の枠組みや手法についても同時に開発できる可能性がある。引き続き、広い視点から学究に取り組みたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① 青山浩之、書写書道教育における今日的な課題－言語活動と書写－、書写書道教育研究、査読有、30 号、2016、印刷中
② 青山浩之、一人ひとりの子どもに言葉の力を育む指導、藤沢市教育文化センター紀要、査読無、2015、5－8
③ 青山浩之、押木秀樹、杉﨑哲子、小学校低学年期における毛筆経験による硬筆書字への影響、書写書道教育研究、査読有、29 号、2015、79－88
④ 青山浩之、言葉の力と言語活動の充実－神奈川県における学力分析を通して－、横浜国大国語教育研究、査読無、38 号、2013、1－10

〔学会発表〕（計４件）

① 青山浩之、書写書道教育における今日的な課題－言語活動と書写－、全国大学書写書道教育学会、2015 年 10 月 11 日、横浜国立大学（神奈川県）
② 青山浩之、書写の授業づくり－豊かな言語活動につながる書写授業の展開－、日本国語教育学会第 77 回国語教育全国大会、2014 年 8 月 9 日、品川学園（東京都）
③ 青山浩之、押木秀樹、杉﨑哲子、小学校低学年期における毛筆経験による硬筆書字への影響、全国大学書写書道教育学会、2014 年 10 月 12 日、埼玉大学（埼玉県）
④ 青山浩之、書写の授業づくり－豊かな言語活動を支える書写学習の展開－、日本国語教育学会第 76 回国語教育全国大会、2013 年 8 月 6 日、品川学園（東京都）

〔図書〕（計５件）

① 青山浩之、NHK出版、今から始める筆ペン、2015、72
② 青山浩之他、全国大学書写書道教育学会、報告書　手で文字を書くことの原理と文字を効果的に書くための方法、2015、48
③ 青山浩之、旺文社、小学生のためのきれいな字になるワーク、2014、96
④ 青山浩之、旺文社、小学生のためのもっときれいな字になるワーク、2014、96
⑤ 青山浩之、朝日新聞社、天声人語書き写しノート　美文字版、2014、48

６．研究組織

(1)研究代表者

青山　浩之（AOYAMA, Hiroyuki）
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：40323919